

【資料4】

～レフェリー・テクニカル～

【主審編】

2018 岐阜県小学生バレーボール連盟 審判研修会

《 》は、2018 年度版 6 人制競技規則ルールブックの記載箇所

※以下「HS」は「ハンドシグナル」のこと

■審判員としての心構え

- ① ルールをよく勉強し、ルールを的確に適用し、公平・公正であること
- ② 疑わしきは罰せず＝確認できた事実のみに基づき反則を適用する
- ③ 自身の判定に対して責任を持ち、自身の誤りは素直に認めて訂正するメンタル力を持つ
- ④ 選手に簡潔にわかりやすく伝える技術と、想定されるケースを実践から学び引き出しを多く持つ
- ⑤ フェアプレーの啓発（グリーンカードの適用等）を行い、体罰・暴言・暴力・差別の根絶に努める

1. 基本姿勢

ラリー中は直立し全体を俯瞰するが、前傾したりしゃがんだり左右に傾くなどは基本しない。

ラリー中は肺の空気を吐ききらないように貯え、HSはルールブックの図のとおり形づくる。片手を支柱上部ワイヤーに掛けるが、肩越しにボールを見ないように左右持ち替える。アタック時は早めにアタッカー側に体を移動させ、トスが上がってからは必ず静止して、一点だけを凝視せず全体を視野に入れる。トスの上がる位置に応じ審判台の上で積極的に前後に移動する。吹笛のタイミングは、ボールが床に落ちた直後、反則の起きた直後に笛らす。笛は強弱ではなく、「強く」と「より強く」の吹き分け、とにかく大きく笛らし、選手の安全のためにもラリーを止める。

2. サービス許可のタイミングと失敗時の措置

サービスの許可は、両チームがプレーする準備ができ、サーバーがサービスゾーンでボールを保持していることを確認した後に行う。主審は吹笛直前に、記録・副審・両ベンチを見渡してからサービス許可する。

◆ サービスの失敗ケース別措置 吹笛⇒次のサーバーサイドを示した後⇒以下のHSを示す

- ①ボールがネットに当たる・・・明らかにネットを越えない時点で吹笛、タッチネットと同じHS
- ②ネット下をノーバウンドで通過・・・ボール全体が通過したら吹笛、センターライン中央を指す
- ③ボールアウトとなるケース・・・《p.44 第5図a》の×の部分。ネット下方の空間通過は上記②
- ④サーバーチームの選手にボールが当たる・・・当たった瞬間に吹笛、タッチネットと同じHS
- ⑤ボールがサーバー側の床に落ちたとき・・・落ちた瞬間に吹笛、タッチネットと同じHS
- ⑥フットフォールト・・・サービスヒットした瞬間に吹笛。踏み越した該当ラインを指で指す

3. ハンドシグナルを出す手順

(1) 主審が吹笛した場合《p.71 22.2.3.1》 ※副審は主審に追従しない

- ①次のサーバーサイドを差す《p.80 第11図②》 長めに（2秒程度）
- ②反則の種類HSを出す。この時反則を犯したチーム側の手を使う。
- ③ダブルコンタクト、キャッチなど反則で、犯した選手が明白な場合は該当選手を示さなくともよい。

周りから解かり難い場合には、手の平を使って示す。（フォアヒットはチームの反則なので指さない）

(2) 副審が吹笛した場合《p.71 22.2.3.2》

- ①副審が反則の種類を表わすHSと犯した選手を差す
- ②主審は次のサーバーサイドを差す
- ③主審に追従して次のサーバーサイドを差す

4. ゲーム中の判定や取扱い

- (1) ボールのイン/アウト判定は、主審が自身の判定を持ったうえで、たとえ落下点から判定が明らかな場合でも必ず責任ラインの該当ラインジャッジとアイコンタクト（子どもには効果的にうなずく事も可）をとり、また、他の反則が起きていないか、副審ともアイコンタクトをとったうえで、最終判定のHSを出す。
- (2) アタック時の「タッチネット」やブロッカーの「ボールコンタクト（ワンタッチ）」を見逃す人は、ボールだけを目で追い過ぎている。1stレシーブは視界の端でなんとなく見えていれば良いくらいのつもりでネット際に目を残し、ネット上部付近の選手の動作が落ち着いたら、ボールをプレーしている選手付近に目を移す。ネット下部の反則は副審に任せ、次のプレーを見る。
- (3) キャッチの反則は、ゲーム序盤の確実に押さえるべきプレーを見逃さないよう集中力を高めておく。1つの試合の中で、厳しさと緩さのバラつきが出ないように、また片方のチームだけ緩くならないよう公平に試合を通して判定の基準を一定にする。
- (4) 競技規則に基づく反則の種類を正確に理解し「今は何の反則を適用したのか」自身の確信を持ち、反則の発生直後に笛が鳴ることが望ましい。
- (5) もし間違っ、吹笛してしまった場合は、素直に過ちを認めてノーカウントとし、誤審を押し通さないこと。そのあとの対応が大切。ゲームを再開しても問題ないか、特に記録・得点板が正しいことを確認後、気持ちを切り替えて再開すること。
- (6) オーバーネットとなるケースを理解し、予測しながら冷静にボールと手の接点の位置(事実)を見る。
①レシーブカットが相手コートに向かって流れ、セッターがジャンプして相手コート側から取り戻すケース
②トスがネット直上または相手方に流れ、アタッカーがネットより相手側でボールに触れるケース
③アタック前のトスボールや、完全にネットを越えないボール（3打目除く）にブロッカーが相手空間でボールに触れる
- (7) 隣コートのボールが侵入した場合、選手の怪我の防止を第一優先し、フロントゾーンへ侵入した場合は基本ラリーを止めるが、コート後方でプレーへの影響が無いと判断する場合は、むやみにラリーを止めない。なお、副審がラリーを止める場合、副審は片手を挙げながら強く長く吹笛（または断続吹笛）しラリーを止める。主審はノーカウントとするため、ダブルフォールのHSを出す。
判断の基準としては、プレーヤーが侵入したボールに気を取られて、プレーに不利益な影響があったかどうかで見る。ケガの危険が予見される場合は、できるだけ早くラリーを止める。
- (8) 反則の未然防止
特に小学生では「選手にプレーさせずして失点させない」よう教育的指導や会話で早めに教えてあげる。「間違っサーバーに打たせない」「教育的指導」などはこの考えに基づく適用である。

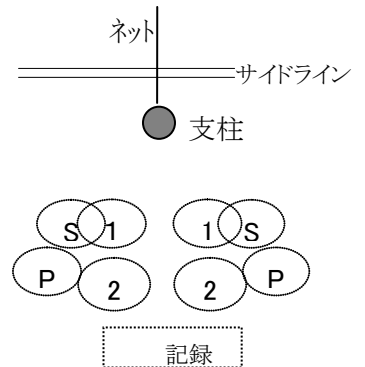
～レフェリー・テクニカル～ 【副審編】

※文中「HS」は「ハンドシグナル」のこと

1. 基本ルーティンと位置取り

- サービス時 レシーバーサイドの(S)でサイドラインに平行に立ち
サービスの打たれる瞬間(音)に全員コート内に居るか
監視する
- インプレー中 ボールの無い側の①でブロッカーを中心に見る
ネット中央より自分に近いプレーの時は②にさがる
- アウトオブプレー 次のレシーバーサイドベンチに目をやりつつ、
ラリーを失った側の(P)の位置へ移動。主審の判定を目視確認して
から両ベンチを(中断要求等ないか)監視しつつ、記録からの合図
(サーブ順誤りなど)がないかなど確認

【位置取り】



次のサーブ直前 何も問題がなければ主審のサービス許可の寸前に

レシーバーサイドの(S)で、レシーバー全員がコート内か監視し、サーブを打つ音を聞く
副審側のアンテナ直上をボールが通過しそうなケースでは、プレーの妨げにならない限り（特に取返しに走る選手に注意し）ボールの無い側のアンテナ付近まで前に入り、見上げて判定する

2. ゲーム中の判定・副審の役割

- (1) ネット付近の反則判定 特にブロッカー側の着地完了を見届ける、ボールを目で追わないこと
- (2) ベンチコントロール
監督の座るべき位置、控え選手の居るべき位置、荷物・ドリンクなどの置き位置、不法行為、マナー等の監視。アウトオブプレーの時には、記録席前で左右ベンチ（中断の要求など）の動きを読む
- (3) 記録および点示のコントロール
記録が正確に記載されているか確認し、記録が未完了のうちに次のラリーが進行されないよう制御
記録がもたついている時は片手を挙げて主審にサービス許可を待たせる。もし主審がこれに気づかず、サービス許可の吹笛をしてしまったら、副審が吹笛してでもゲームを止め、記録側の問題を解決する
主審のサービス許可の直前、サーバーの確認時は、主審～記録の間に入らないよう支柱から離れて位置し、記録からのサーバーが間違っている合図に気を配り「間違ったサーバーに打たせない」よう徹底する
もし得点板が間違っている場合副審はラリーの完了を待って、点示係りに訂正を指示する
- (4) 中断の要求と時間のコントロール
タイムアウト、テクニカルタイムアウト、選手交代、の要求可否、セット間の時間計測
- (5) 主審の判定を補佐する
ラリー完了後、失点したサイドに立つことや、主審の求めに応じて合図を送ることで主審を補佐する
- (6) 副審の責務として判定・吹笛しなければならないケース
 - ①タッチネットの反則（アタッカーやネット上部の場合は主審に譲る）→腕を前方水平に伸ばして HS
 - ②ペネトレーションフォールト（相手コートへの侵入）の反則 →コート中央ネット下を指さす HS
 - ③副審側のアンテナまたは同アンテナ外側の物体にボールが当たった場合 →アウトの HS
 - ④サーブしたボールや第3打目のボールが、副審側のアンテナ外を通過した場合 →アウトの HS
 - ⑤ボールが床に落下したが、主審が確認できてなく吹笛しない場合 →ボールインの HS

3. 主審との連携・主審への合図（吹笛はしない）

- ①HSの主審の追従はしないが、ラリーを失ったチーム側へ移動することで、主審の判定を補佐する。
 - ②問題なし（サブ順や得点表示など）の記録・主審とのアイコンタクト・・・うなづく
 - ③ボールコンタクトの合図・・・特にブロッカーのワンタッチでは、素早くブロッカー側に移動して立つ
主審の求めがあれば、お腹の前で小さく両手で屋根形を作り、ボールコンタクトがあったと合図を送る。
ワンタッチ無きボールアウトの場合は、アタッカーサイドへ移動しうなづくのみ
 - ④3打目がネットを越えずはね返った時・4打目触った時点で、素早くアタッカー側に移動して立つ
主審の求めがあれば、お腹の前に指4本（=フォアヒット）ただし、3打目と同じプレイヤーがはね返ったボールに触れた時は指2本（=ダブルコンタクト）
- ※主審が求めているのに、むやみに副審から合図を送ることは判定の強要になったり、チームとのトラブルの元となるので注意。特に副審側サイドラインに関わるイン/アウトの積極的な合図は厳禁

4. 中断または中断の要求のコントロール

- (1) セット間の中断は3分間だが、中断の終了を合図する副審の吹笛は、2分30秒で鳴らす《p.117 セット間》
- (2) タイムアウトの動作手順 《p.56 15.4.1》
 - ・タイムアウト要求時、監督はハンドシグナルが必須。口頭だけでは要求とは認められない
 - ・副審は要求を認めたら、吹笛→HS→要求サイド示す→計時開始→ボールを受取り→両ベンチを見て、選手をベンチ寄りに寄せ→ボールを記録席横に置く→記録に次のサーバーの番号、タイムの要求回数を確認→振り返り主審と目を合わせ何も無いことを確認（主審が副審を呼び寄せたい時はここで手招きする）→支柱を背にして両ベンチに目配せ→30秒直前で振り返り主審と「始めるよ」と目を合わせた後、コートの方を向いて吹笛（HSは無い）すみやかに選手をコートへ入れる。
 - ・チームの2回目のタイムアウトでは、先に2回目である旨主審に通知する。なお要求した監督への通知は、タイムアウト終了の吹笛後かつボールを次のサーバーに送った後、2回目である旨通知する。
- (3) テクニカルタイムアウトのコントロール 《p.96 第4条6》《p.97 付則1》
 - ・第1セットおよび第2セットでは、リードするチームが11点に達したとき、副審が吹笛し計時（30秒）する。ハンドシグナルは特に無いが、ベンチにさがるよう手振りを加えてもよい。
 - ・第3セットでは、リードするチームが8点に達したとき
 - ①主審は笛でエンドラインに選手を並ばせ、笛とHSでコートチェンジを誘導する。
 - ②副審は両チームのコート上の6人が、ネットの反対側に移動したら、それぞれのベンチにさがるよう誘導し、両チームの選手全員がベンチに近い側のサイドラインを越えフリーゾーンに出たのを確認してから、副審が吹笛し、同時に計時（30秒）に入る。特に主審の後ろを回るチームは遠回りしてベンチに戻ることから、テクニカルタイムアウトの時間30秒を必ず確保する。
 - ・テクニカルタイムアウトは給水のための時間として、選手に給水させなければならない。従って水筒などが選手のもとに用意されているか、逆にベンチスタッフが給水を妨げる行為をしていないか監視し（飲む飲まないは本人の自由だが）給水を促すこと。テクニカルタイムアウト中、選手がストレッチをしたり、控え選手がモップをかけたり、うちわで他の選手を扇ぐなど、選手の安全管理のためのこれらの行為は禁止ではないが、ベンチスタッフや審判団は、給水のタイミングを逸している選手に給水を促し、積極的に体調をうかがう。また、コートオフィシャル（ラインジャッジ・点示）にあたっている子供達にも、給水や健康・安全のための配慮を行うこと。なお、水筒は得点板の裏側など、試合の妨げとならない位置であるか点検しておく。

(4) 選手交代の手順 《p.58 15.10》

- ・ 交代選手が交代ゾーンに侵入＝要求とみなす、監督のHSは必要なく、交代の要求とは認めない。
 - ①副審は長い吹笛しながら交代のHS（ゆっくり1回転）を出す（主審は吹笛せず、HSも出さない）
支柱付近に立ち、交代選手・監督・記録を視野に入れて立つ。声をかけられるように笛は口から外す。
 - ②交代ペアをアタックラインよりネット側のサイドラインを挟む位置に招き、双方片手を挙げさせる。
 - ③記録員は、許可できる正規の要求と確認したら片手を挙げ→副審は胸の前で腕を交差し交代を許可。
 - ④記録員が必要事項を書き終えたら、両手を挙げて記録の記載が完了した旨知らせる。
（→複数の場合、2人目以降は記録席近くに待機させ④に続き上記②～④の手順で1組ずつ交代させる）
 - ⑤記録の記入状況や選手交代の回数を確認し、11回目および12回目の要求は、まず主審に、その後監督に、指を使ってその回数を通知する。
 - ⑥副審は両ベンチ見て何も問題無ければ、笛をくわえてから両手挙げ、主審へゲーム再開OKを合図

<補足>

- ・ 同一チームによる2組以上交代の注意点
2人以上の交代選手が、ほぼ同時（連続して）に交代ゾーンに入ってきて来れば同一要求とみなすが、時間を空けて2人目がゾーンに入ってくるケースは拒否し、2組目の交代要求は認めない。
- ・ 両チームから同時に交代の要求があった場合
記録と左右どちらのチームを先に受付けるか確認し、片方の手続きが完了（両手挙げ）した後、反対側のチームの受付のため、該当チーム側に立ち、改めて吹笛とHSを出す（前記(4)の①～⑥の手順を行う）

(5) 不当な要求 《p.58 15.11》

主審のサービス許可の吹笛後に、交代選手が交代ゾーンに入ったり、タイムアウトを要求した場合、副審は吹笛せず手のひらで抑えて拒否し、ラリー終了後「不当な要求」として記録（周りに気づかれないくらい軽微な要求動作はあえて「不当な要求」とまでしなくてもよい）
もしサービス許可の吹笛後に副審が吹笛してしまった場合は、要求は拒否され、さらにチームに遅延の罰則が適用される。

※そもそも主審がベンチの様子も視野に入れながらサービス許可すればこういうトラブルは起こらない

(6) 遅延に対する罰則の適用手順

主審は、反則を犯したチーム側の腕を斜めに立て、反対の手でイエローカードを持ち、斜めに立てた腕の手首にカードを当てる →副審は記録員に該当欄へ記入（罰則欄の警告に「D」、犯したチームのA:B、セット数、スコア）を指示し、正しく書かれたか目視確認する

5. 副審のゲームコントロールに関するその他のケース

- ①判定へのチームからの抗議は一切認めないが、ベンチスタッフの行為がエスカレートしないよう副審が早い段階で抑える
- ②床が汗でひどく濡れた時 →副審は片手を挙げ濡れた箇所に行く。コート上の選手は携帯タオルでワイピングさせ（手のひら・ひざ当てや靴で拭くのは認めない）床の状態を自分で確認後、定位置に戻りゲーム再開OKの合図の意味で両手を挙げる。なお、携帯タオルでは追いつかないほど、ひどい濡れ方の時は、ベンチにモップを入れて拭くよう指示する。モップは審判員の指示でのみ入れることができる

～レフェリー・テクニカル～ 【ラインジャッジ編】

1. ラインジャッジの受持ちゾーンの基本 ～L3番で例示～

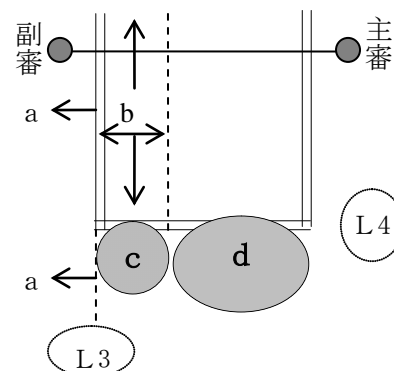
L3の受持ちはサイドライン（及びその延長線）の左側（a）の「アウト」および、サイドライン内側=右側（b）の「イン」

なお、（b）はサイドラインから概ね2mコート内側とする。

（c）（d）に落ちたアウトボールはL4の受持ちでL3は責任外のためL4の判定を優先する。なお（c）付近ギリギリの「イン」の場合はL3も当然受持ちであるから「イン」を示す。

この時L4の判定に追随するとよりベター(子どもには難しい)

（c）付近のアウトを、L3が出したとしても間違いではない。



どのラインジャッジも自分から見て受け持ちライン左側の「アウト」と右側コート内2mの「イン」の受持ちゾーンを考え方は同じ。指導を単純にするため受け持ちライン右側の「アウト」は出さないと指導する。L1・L3はネットの向こう側も受持ちであることは、試合前のミーティングなどで意識させる。

2. その他ラインジャッジに関わる事項（右利きの場合 *左利きの方は利き手で旗を持ってよい）

- ①立ち位置：コート角から1.5～2.0m離れ、受け持ちラインの延長線をまたぐように立ち、左足を靴半分程度前方に出して構える。（左利きも左足を前に出す）
- ②サーバーが左端後方のL1・L3に近づいて構える場合は、サーバーの視野に入らない様、ただし受け持ちライン延長線を外れないようにまっすぐ後ろにさがる。サーブを打った後定位置に戻る。
- ③フラッグシグナル（以下：F S）は人差し指を伸ばして棒に沿って持ち「イン」は45度斜め下向き「アウト」は真上の天井を人差し指で指すつもりで、肘を伸ばして旗を出す。
- ④サービス許可の笛と同時に、前方に伸ばした旗を”バサッ”と音を立てて降ろす慣例？は間違い。サービス許可前には、右足ふくらはぎの後ろに旗を沿わせて構え、旗の音は鳴らさない。
- ⑤判定の直後必ず主審とアイコンタクトをとり、判定の確認を行うこと。
主審が目を合わせない場合は、自分の受け持ちではなかった（旗は出さない）と解釈する。
- ⑥ボールコンタクトは自コート側選手の時2人ともF S《p.87 ③》を出す。さらにサイドライン外側にボールが落ちたケースでは、L1・L3は相手コート側のものもF Sを出す。
- ⑦アンテナおよびアンテナ外側の物体（ネット、支柱、審判台）にボールが当たった時、ラインジャッジ全員がボールの当たった箇所を左手で指さし、4人同時に旗を右⇒左⇒右《p.88 ④》と一往復させる。
- ⑧サーバーのフットフォールトは、ボールをヒットする瞬間の足、またはジャンプサーブの踏切の足を見て判定し、エンドラインまたはサイドライン（サイドライン延長線外側に踏み出している場合）の該当ラインジャッジ1人のみがラインを指さし、旗を右⇒左⇒右《p.88 ④》と一往復させる。
- ⑨ラインジャッジは、試合を通じて同じ人が行うことが望ましいが、セット間に交代する場合は主審に申し出て許可を得ると共に、試合前のミーティングで主審から受けた注意事項・指示をラインジャッジ同士で引き継がせること。